

山崎紫紅

「歌舞伎物語」のこと

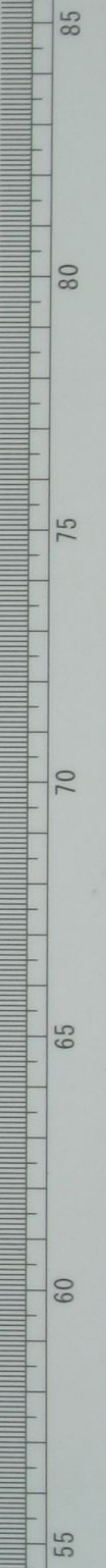
しこう

「歌舞伎物語」のこと
「新思潮」と「明星」に書
くことだけは書いてなす。そこへ
「いふに似せですが、何も極だつてこゝろの苦心を致しませぬ。苦心談を
いやいやり出さるほどの事はないのです。こゝでこの脚本を
書きました。動機と、それから材料を、手短かに申し上げま
せう。

この脚本は雑誌「明星」へ送ら
れた。これと申して纏まつたことの出
ては五りませぬ、ほんの且月々々の出来事
を付けたもので、自分も思ひ切つて大甘に書い
た。種々な御評を伺ひますと、素人作者の通
弊たる白かぼりでも、書きがたいとか、バツ
つて居るとか、種々なお叱りも受けました。演
では、いい、二テ外は「一回」といふやうな箇
外もありました。は、折角新編にかつての
大團圓に對しても、気の毒でし
た。尤もこれは一番後の人に、目録た
めせうに云はせ、こと
と、
生
今
後

197

昨日



Handwritten notes on the right page, including a large red '19' at the top left. The text is dense and appears to be a continuation of the main text or a separate entry.

幕のよりは、
無構だが、
思ひ付らるる
三番手
出ま
秀康は、
弟の
物足なく
思はれたら

19
秀康が死すこと
病症は
思はれたら
大日本史
山三が毒
ここを
山三が毒

Handwritten notes in Japanese, including the name 'Shinjiro Takemura' (高村新次郎) and other illegible characters.

と定めようとした。ナラあまの力は藝術と云ふとは切らしかたし
とる古い思想を断つてしまつた。ただ、何しろ智慧の力を作
者のことである。その神妙なる、身分のといふものにあまり
に拘まつて、遂に藝術の道に迷つてしまつた。出来ず、藝術だ
けを相手にして、苦しい糧の餌を二はせたのは、自らでも果
然とほどの不始末である。枝多依渡舟を序幕に出したのも、
何もあれだけの事である。もつと身分のつけた人でもよ、
です。何にしろ、今の状況では、一言も全言、口端に上
る人を便はめと、対象がかなないで、あの老人を思はしたの
です。土屋を馬介は超前家の老臣で、確か秀康が死去

した後で、大坂戦も出た。死んでから、生き残るかに書いたり
残つて、大坂戦も出た。死んでから、生き残るかに書いたり
ですが、土屋の子孫の右京などは、全く作者の頭脳から生
まれたものです。二世の二もよいか減る名を付けたので、何
にせよ、事實は正史には少しもふい事です。秀康も死所は
大坂戦である。つまり、たゞ死せし年と、それから江戸の代官大
岡十次郎といふものを、秀康が後報殺したことがあるか
まの名を及用して、更に思ひましたのと、右京の茶の
一段が石田三成を大岡が罷用した始末の故めもので
あるが、事實を加味した箇外であります。

192

石は 結りに申上げて返りますのは、
 三本足等の筆よあつた。板をそのまゝ
 先生主人から得ましたことを、私の名義として
 附記し
 返ります。

石は 結りに申上げて返りますのは、
 三本足等の筆よあつた。板をそのまゝ
 先生主人から得ましたことを、私の名義として
 附記し
 返ります。

236

2 「信玄最期」の由来

甲信 旅行した帰りが、飯田から三川へ向かう途中を十六七里歩きました。夏の日も大分回った頃、駒場といふ所を通りますと、谷に信玄の墓と申傳へる。小坂塔があり、そこは信玄が野田攻めの際、病を得て死去せし遺骸を葬つた所とも、またこの夜、こゝで死なされたとも申すことで、この時私はこの英雄の屍を取巻くところの、甲州方の馬場山縣など、おれ、勇將の落める眉目に、万腔の愁色を帯びたさまを、胸に描いた。

たのが、この「信玄最期」を書きます發端であります。

その後種々の史料によつて調べて見ると、死志の當時にその薬を秘したほどあつて、様々の異説はこの英雄の死の前後左右を取り圍んで、三河の鳳来寺や、四ノ宮があつたの、または私が用ゐました、~~...~~ 鏡に申つて死したとか、或は單に及病して死したとか、~~...~~ 世の英雄を佛附たるの、單の病死ぶをにせる、~~...~~ は、平素好む、面白くない、どうしても鉄炮で死ん

いふは、信玄の死、
 三河の鳳来寺、
 四ノ宮、
 飯田、
 駒場、
 野田、
 三川、
 十六七里歩、
 夏の日も大分回った頃、
 駒場といふ所を通りますと、
 谷に信玄の墓と申傳へる、
 小坂塔があり、
 そこは信玄が野田攻めの際、
 病を得て死去せし遺骸を葬つた所とも、
 またこの夜、こゝで死なされたとも申すことで、
 この時私はこの英雄の屍を取巻くところの、
 甲州方の馬場山縣など、
 おれ、勇將の落める眉目に、
 万腔の愁色を帯びたさまを、
 胸に描いた。

Handwritten text on the right page, including the characters '大五郎' and '信玄'.

Main handwritten text on the left page, starting with 'た運命の尽きた所' and '大五郎'.

はあまり上手に吹き手ではないと申して置かれました、
この人が上手な笛吹たと、何流もか減ります、
儀言母の方からさういふ、裏店の三味線に感ずつたさま
があつたといふのが、この作意です。

この曲を聴くのは

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on aged, yellowed paper and is oriented vertically. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used. There are some larger characters and symbols interspersed among the lines of text. A dark ink smudge or mark is visible near the bottom center of the page.